

大阪の夏祭り調査報告

内田吉哉

1. 大阪の夏祭り

最初に、「大阪の夏祭り調査報告」というタイトルについて説明いたします。関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターの祭礼遺産研究プロジェクトは、平成17年の6月末から8月初頭にかけて大阪の夏祭りの調査を行ないました。この調査は、大阪のブランドイメージをアピールしていくことを目的とした大阪ブランドコミッティという団体との提携に基づいて、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターが、「大阪夏祭りカレンダー」作成のための基礎的データの収集作業を行なったものです。

調査活動は、祭礼遺産研究プロジェクトのプロジェクトリダーである黒田一充氏（関西大学文学部助教授）のもとで、関西大学の大学院生に調査員として協力していただきました。これらの調査内容について、撮影写真を紹介しながら報告していきたいと思います。

まず、大阪の夏祭りについて概要を説明いたします。表1の大阪の夏祭り一覧を見ると、はじまりが6月30日で終わりが8月1日となっています。この6月30日に行なわれる愛染祭から8月1日に行なわれる住吉祭までの約1か月間が大阪の夏祭りの期間とされています。大阪の夏祭りという愛染祭と住吉祭、それから天神祭が大変有名なのですが、実際にはこの表1を見るとよくわかるように、その他にもたくさん祭りがあります。そこで問題は、これらの祭りの中からどのお祭りをピックアップして調査するかということになります。全ての祭りを調査に行くことは物理的にも不可能ですので、まず第一に、特色のある祭りを優先して調査することにしました。第二に、地理的に遠い、交通の便の悪いところや、夜に催される祭りは、調査員である大学院生たちのスケジュール等の都合上から取材が難しいのでなるべく避けました。

祭りは夏祭りだけでなく、春夏秋冬と四季ごとに催されているわけですが、最初は春の祭りと秋祭りから始まったと考えられています。春と秋と

というのは農業のうえで重要な時期であり、特に稲作に関連する祭りが行なわれます。春であれば田植えとともにその年の豊作を祝う、予祝の性格を持つ春祭りが行なわれます。秋であれば稲作の収穫を感謝するための秋祭りが行なわれます。春祭り・秋祭りの次に、冬の祭りがはじまったといわれています。冬の祭りというものは、農業が行われない農閑期の骨休めとして行われた祭りなので、芸能などの要素が含まれているのが特徴であるといわれています。

春夏秋冬の季節の祭りのなかで、最後にはじまったのが夏祭りであろうといわれています。夏に祭りを行う意味として、ひとつには夏は疫病や飢饉が発生する時期ですので、それらを防ぎたいという願いが込められています。平安時代から始まった御霊信仰にもとづいた、怨霊が災いを及ぼして疫病や飢饉を引き起こすという考えから、夏祭りを行なって怨霊を鎮めようとするのです。もうひとつ夏祭りの特徴として、祭礼の要素が含まれることがあげられます。民俗学においては祭りという言葉と祭礼という言葉とは区別して使われており、祭りというと普通にいわゆる「お祭り」のことを指しますが、祭礼というと、例えば御神輿やだんじりといった、見世物・パフォーマンス的な要素が含まれるものであるとされます。

大阪の夏祭りは表1にありますようにほぼ7月に行なわれています。これは旧暦6月の祭りを太陽暦に置き換えるとほぼこの期間になるということです。旧暦でいうと6月がちょうど真夏にあたりますので、旧暦6月、太陽暦では7月に行なう祭りが夏祭りということになります。

たくさんの祭りがありますが、これらは大きく4つの性格に分類できます。一つ目は先ほど述べたように、夏の疫病や飢饉の災いを祓う祭りです。二つ目は農村の祭りの要素が含まれた、農業に関連した祭りがあります。三つ目には、旧暦6月を新暦に換算するとその中に7月7日、七夕の日が含まれていますので、七夕に関連する行事がみられます。四つ目には、旧暦6月7日が修験道の開祖とされる役行者の命日という伝承がありますので、この日付を新暦に換算して7月7日、ちょうど七夕の時期に修験道の行事が行なわれます。大阪の夏

6月30日	愛染祭(天王寺区) 茨木神社輪くぐり神事(茨木市)	7月17日	感田神社(貝塚市) 瓢箪山稲荷神社(東大阪市) 高津宮夏祭(中央区) 日根神社ゆ祭(泉佐野市) 春日神社夏祭(泉佐野市) 伊居太神社例祭(池田市)
7月1日	愛染祭(天王寺区)	7月18日	瓢箪山稲荷神社(東大阪市) 高津宮夏祭(中央区) ございば、朱印 河堀稲生神社夏祭(天王寺区) 呉服神社例祭(池田市)
7月2日	愛染祭(天王寺区) 石切劔箭神社献牛祭(東大阪市)	7月19日	東高津宮例大祭夏祭(天王寺区) 野田恵比須神社(福島区) 河堀稲生神社夏季大祭(天王寺区)
7月3日		7月20日	東高津宮例大祭夏祭(天王寺区) 野田恵比須神社(福島区)
7月4日		7月21日	坐摩神社夏祭(中央区) 陶器祭 難波神社氷室祭(中央区) 氷柱の奉納 三光神社神祭(天王寺区) 寺方の提灯踊り(守口市)
7月5日		7月22日	坐摩神社夏祭(中央区) 難波神社氷室祭(中央区) 三光神社神祭(天王寺区) 能勢妙見山虫弘会祈祷会(豊能郡能勢町) 寺方の提灯踊り(守口市)
7月6日	機物神社七夕祭(交野市)	7月23日	坐摩神社夏祭(中央区) 科長神社夏祭(太子町) だんじり・神輿 星田妙見宮妙見祭(交野市)
7月7日	瀧安寺大護摩供修法(箕面市) 金剛山蓮華祭(千早赤阪村) 星田妙見山七夕祭(交野市) 機物神社七夕祭(交野市) 安倍晴明神社夏祭(阿倍野区) 大阪天満宮七夕祭(北区)	7月24日	天神祭(北区) 茅の輪くぐり・鉾流神事 生根神社だいがく祭(西成区) 科長神社夏祭(太子町) 佐太天満宮夏祭(守口市)
7月8日	大津神社夏越祭(羽曳野市)	7月25日	生根神社だいがく祭(西成区) 天神祭(北区) 船渡御 紀部神宮例祭(池田市) 佐太天満宮夏祭(守口市) 渋川神社逆祭(八尾市)
7月9日	大森神社灯籠祭(熊取町)	7月26日	渋川神社逆祭(八尾市) 安倍晴明神社夏祭(阿倍野区)
7月10日		7月27日	渋川神社逆祭(八尾市) 安倍晴明神社夏祭(阿倍野区)
7月11日	杭全神社夏祭(平野区) 生國魂神社夏祭(天王寺区) 豊太閤奉納	7月28日	興覚寺ほうろく灸祈祷(土用丑日)(堺市)
7月12日	杭全神社夏祭(平野区) 生國魂神社夏祭(天王寺区) 難波八坂神社夏祭(浪速区) 白鳥神社夏祭(羽曳野市)	7月29日	
7月13日	杭全神社夏祭(平野区) 難波八坂神社夏祭(浪速区) 堀越神社夏祭(天王寺区) 五社神社例祭(池田市) 細河神社例祭(池田市) 弁財天祭(交野市)	7月30日	住吉祭(住吉区) 茅の輪くぐり
7月14日	杭全神社夏祭(平野区) 難波八坂神社夏祭(浪速区) 茨木神社夏祭(茨木市) 平野夏祭(平野区)	7月31日	住吉祭(住吉区) 道隆神社大祓祭(貝塚市)
7月15日	玉造稲荷神社夏祭(中央区) 越瓜のふるまい 茨木神社夏祭(茨木市) 大江神社夏祭(天王寺区) 久保神社夏祭(天王寺区) 五條宮夏祭(天王寺区) お初天神夏祭(北区) 地車囃子 八坂神社例祭(池田市)	8月1日	住吉祭神輿渡御祭 宿院頓宮お祓い神事(堺市) 一岡神社祇園祭(泉南市)
7月16日	玉造稲荷神社夏祭(中央区) 感田神社(貝塚市) 太鼓台祭 日根神社ゆ祭(泉佐野市) 大江神社夏祭(天王寺区) 久保神社夏祭(天王寺区) 五條宮夏祭(天王寺区) お初天神夏祭(北区) 例大祭・宮入 門真神社例祭(門真市)		

表1: 大阪の夏祭り

祭りにはこれらの4つの性格を見ることができま
す。では写真を紹介しながら大阪の夏祭りの調査
報告をはじめます。

2. 調査報告

6月30日～7月2日 勝鬘院・愛染祭

まず、6月30日から7月2日にかけておこなわれ
る愛染祭です。写真1は四天王寺の別院である勝
鬘院の門前です。愛染祭はなんといっても宝恵駕
籠がこのお祭りの最大の特徴となっています(写
真2)。籠の中には愛染娘に選ばれた女性が乗っ
ています。この宝恵駕籠が高く担ぎあげられ、何度
もぐるぐる回転させられます。ここが愛染祭の最
大の見せ場ですが、駕籠を回すようになったのは
最近のことで、単に報道陣へのサービスである
ということです(写真3)。この愛染祭が大阪の夏祭
りの幕開けとされています。愛染祭は大阪で一番
早く行なわれる夏祭りですが、写真の愛染娘が浴
衣を着ていることからわかるように、大阪の夏
祭りのなかで一番早く浴衣を着る祭りとして、別
名、浴衣祭とも呼ばれています。



写真1：勝鬘院



写真2：愛染祭 宝恵駕籠

7月2日 石切劔箭神社・献牛祭

続いて7月2日には、東大阪市の石切劔箭神社で
献牛祭が行われます。写真4は境内の様子です。
献牛祭という名前の通り、牛が関連する祭り
です。お祭りの時には写真5のような、発泡スチ
ロール製の造り物の牛を引いてパレードをしま
す。パレードは神社から出て商店街を抜け、さら
に近鉄石切駅の東側に渡り、上之社という神社
へ向かいます。ただし、今年は調査に行った日
があいにく雨天であり、写真4を見ての通り、
牛にもビニールがかけられており、パレードは
見られませんでした。

献牛祭はその名のとおり、牛が関係する祭
りですが、これは農村の祭礼の要素が入って
いることができます。献牛祭が行なわれる7
月2日は旧暦でいうと6月の初頭にあたりま
すが、この時期は半夏生の日にあたります。
半夏生は、大阪あたりではハゲと言うこと
もあり、この日までに田植えを終わらせな
ければならない日であるとされています。半
夏生の日までに田植えを終わらせ、半夏生
の日は農作業を休み、田植えで大いに働
いてもらった牛にも休んでもらうというこ
とです。そういうわけで、半夏生の日に催
されるこの献牛祭は、牛をパレードさせる
という行事が行なわれています。昔は本物
の牛を飾り立ててパレードし



写真3：愛染祭 宝恵駕籠



写真4：石切劔箭神社



写真6：機物神社



写真5：造り物の牛

ていたのですが、牛が観客に驚いて暴れたりするので、今のような造り物の牛をパレードさせる形式になったそうです。

7月7日 機物神社・七夕祭

7月7日は七夕の時期にあたりますので、七夕の祭りがいくつかおこなわれます。交野市に機物神社という神社があり、写真6は機物神社の境内の様子です。それぞれ家庭で七夕飾りを作り、それを神社に持ち寄って境内に立てて、七夕祭りをを行います（写真7）。その他に、境内でも七夕の短冊を販売しており、その場で短冊を買って飾ることもできます。

この交野市というところは、昔から七夕信仰が強く残っており、七夕にちなむ信仰や説話がいろいろと伝わっている土地です。地名にも「天の川」という名前の川があるほどで、機物神社も七夕の祭りを盛大にやっています。

機物神社は、もとはこの地にはじめて機織りの技術を伝えた漢人庄員を祭神としていましたが、平安時代になると京都から貴顕が遊狩のために交



写真7：機物神社 境内



写真8：機物神社 境内

野を訪れ、当時盛んだった天体崇拜思想や文学的趣味から転じて七夕信仰に結びついたとされています。また他に、陰陽道の影響が機物神社の祭神を七夕神にしたとする説もあります。

七夕の祭りとおわせて、茅の輪くぐりも行なっています（写真8）。これは夏の疫病を祓うために、境内に茅で編んだ輪が設置され、これをくぐることによって夏の災いを祓うことができるとされています。7月6日が宵宮で、7月7日の本宮では神輿が出て神事があり、短冊のお祓いと祈願をおこなって、夜中に笹を天の川に流します。

7月7日 星田妙見宮・七夕祭

同じく交野市に星田妙見宮という神社があり、ここも機物神社と同じく七夕祭を行なっています(写真9)。星田妙見宮は正式名を小松神社といますが、これは明治時代の神仏分離令以降の名称です。写真10のように、星田妙見宮の七夕祭では、本殿の中に七夕飾りがたくさん飾られています。妙見というのはつまり北斗七星ですので、星田妙見宮は写真11のように、幕に北斗七星がかたどられています。機物神社と同じく境内にも七夕飾りが飾られ、茅の輪も設けられています。七夕祭り



写真9：星田妙見宮



写真10：星田妙見宮 本殿の七夕飾り



写真11：星田妙見宮 本殿

の性格を持つ祭礼の2例目として紹介しました。

7月7日 瀧安寺・採燈大護摩供

先述したように旧暦6月7日、新暦では7月7日頃がちょうど役行者の命日となっています。そこでこの時期には修験道の要素が含まれた夏祭りも行なわれます。箕面市にある瀧安寺で行われている採燈大護摩供を紹介します。写真12の場面は法弓の儀といい、矢をつがえて、東西南北と中央と鬼門とで合計6つの方向に高く矢を放ち、結界を張る作法を行ないます。



写真12：瀧安寺 法弓の儀



写真13：瀧安寺 斧の作法



写真14：瀧安寺 護摩の儀礼

次に、斧の作法を行ないます（写真13）。これは斧でお祓いをする作法で、山の神様に対して行われる作法であるといわれています。そして、採燈大護摩供の最も重要な儀式である護摩の儀礼が行なわれます（写真14）。木を井桁に組んで護摩を焚きます。箕面の瀧安寺の採燈大護摩供では、護摩壇を覆うヒバは高山という集落が昔から奉納しています。採燈大護摩供が終わったあと、高山地区の代表者は護摩壇の灰を持ち帰って集落の人に分けるといことが行なわれています。

7月7日 転法輪寺、葛木神社・蓮華祭

同じく修験道に関連する事例をもうひとつ紹介します。千早赤阪村にある転法輪寺という寺院と葛木神社という神社で行なわれている蓮華祭です。大阪在住の方には千早赤阪村の金剛山という呼びかたの方が通りが良いかもしれません。祭の内容は、まず葛木神社で神職が例祭を執り行ないます（写真15）。そして、葛木神社の例祭が終わった頃に、転法輪寺から山伏がやってきます（写真16）。山伏は葛木神社で法楽をささげ般若心経を唱えた後、転法輪寺へ戻って儀礼をおこないます。写真17は大法弓の儀といい、弓矢で结界をはる儀式を行うものです。その後、瀧安寺の採燈大護摩供と同じように護摩を焚きますが（写真18）、蓮華祭では護摩供のあとで火渡りの儀式が行われます（写真19）。先ほど護摩を焚いた、その火が燃えつきた後で、その上を山伏や信者の方が歩いてわたります。



写真16：蓮華祭 葛木神社へ山伏が来る



写真17：蓮華祭 転法輪寺 大法弓の儀



写真18：蓮華祭 転法輪寺 護摩



写真15：蓮華祭 葛木神社例祭



写真19：蓮華祭 転法輪寺 火渡りの儀式

7月11日、12日 生國魂神社・いくたま夏祭

7月11日から12日にかけて生國魂神社で行われています、いくたま夏祭です。生國魂神社は現在でも大変氏子区域が広く、ある氏子地域からは獅子舞が出てきます（写真20）。また別の地域からは神輿が出されます（写真21）。また別の地域からは枕太鼓が出されます（写真22）。氏子区域が大変広いので、それぞれ氏子区域ごとに、出し物が枕太鼓、神輿、獅子舞というふうに分かれています。

写真23もいくたま夏祭りの風景ですが、子供が頬や胸に朱印を押しています。朱印を押す意味については、今後の調査研究を待たねばなりません。大阪の夏祭りの中で他にも似た事例がいくつかみられます。

7月11日～14日 杭全神社・平野郷の夏祭

いくたま夏祭とほぼ同じ時期、7月11日から14日にかけて平野郷の夏祭が行なわれます。この祭りはだんじりが大変有名です。写真24、写真25が平野郷の夏祭のだんじりです。平野区には杭全神社という神社があり、だんじりは夜になると杭全神社に宮入を行います。このときの様子は、各だんじりが先を争って宮入を競い、大変激しい状況で、けんか祭という別名もあるほどです。今回は調査をおこなった大学院生が女性ということもあり、見学に行くうえで少し危ないかなという心配もありましたので、実際に宮入の場面を調査するのは遠慮させていただきました。

この平野郷の夏祭で、もっとも特徴的なのは杭全神社から出発した神輿が寺院に立ち寄るという点です。杭全神社から出た神輿が、長宝寺という寺院と、全興寺という寺院と、二つの寺院をまわります（写真26）。写真27は、神輿が長宝寺の中に入った様子です。長宝寺に神輿が来まして、



写真20：いくたま夏祭 獅子舞

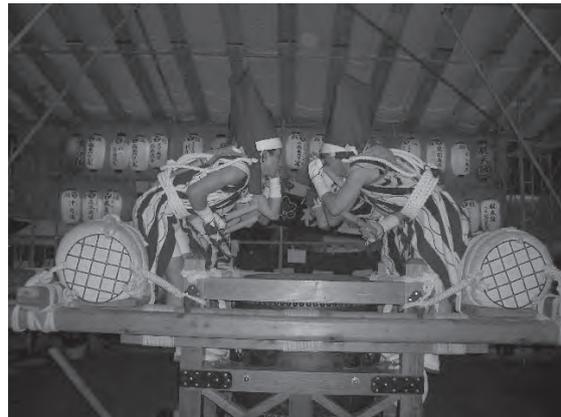


写真22：いくたま夏祭 枕太鼓



写真21：いくたま夏祭 神輿



写真23：いくたま夏祭 朱印

写真27では神職さんが神輿を拝んでいます。その後ろに僧侶も写っています。神様が乗っている神輿を僧侶が拝むという、神仏習合の名残がみられる点が大変特徴的なのですが、今回の調査ではシャッターチャンス逃してしまいまして、僧侶が神輿を拝んでいるシーンを撮り損ねてしまいました。

7月18日 高津宮・夏祭

写真28は、日本橋付近にある高津宮の夏祭です。文楽や歌舞伎などで有名な「夏祭浪華鑑の殺し」の場面は、この高津宮の境内が舞台だとされています。さて、この高津宮の夏祭ですが、特徴のひとつとして、「ごさいば」、植物学の和名としてはアカメガシワというのが正しいようですが、境内

に生えておりますごさいばを神饌として神前にお供えするというのがあげられます（写真29）。

写真30は高津宮夏祭の神輿です。神輿は黒門市場の地区（地下鉄日本橋駅付近）と桃園地区（谷町六丁目付近）の二か所から出ます。黒門地域の神輿は「黒門みこし」桃園地区の神輿は「鳳みこし」と呼ばれています。写真31ですが、先ほどのいくたま夏祭と同じように、朱印を押しています。写真31では、子供が額に朱印を押してもらっていますが、昔は胸の真ん中に一か所押すのがしきたりだったといわれています。今は顔でも腕でもあらゆるところで、要望に応じて朱印を押してもらえるということになっています。

写真32ですが、高津宮の夏祭では、獅子頭のついた笹を縁起物として授与しています。



写真24：平野郷の夏祭 だんじり



写真26：平野郷の夏祭 長宝寺門前



写真25：平野郷の夏祭 だんじり



写真27：平野郷の夏祭 長宝寺



写真28：高津宮 境内



写真29：高津宮夏祭 ごさいば



写真30：高津宮夏祭 神輿



写真31：高津宮夏祭 朱印

7月15日、16日 玉造稲荷神社・夏祭

7月15日、16日に行われます、玉造稲荷神社の夏祭です。この玉造稲荷神社というのは、なにわ伝統野菜のひとつである越瓜で有名で、写真33のように境内に案内が掲示されており、玉造黒門越瓜という名前で写真34のように境内の中で栽培しています。夏祭のときには写真35にみられますように、越瓜をふるまって食べさせていただけるということになっています。

7月21日 坐摩神社・夏季大祭

7月21日に行われています、坐摩神社の夏季大祭です。坐摩神社は正しくは「いかすり神社」と読むそうですが、一般に「ごま神社」と呼ばれて広く親しまれています。

写真36では境内にのぼりが立っています。7月21日の夏季大祭のときに瀬戸物市が行なわれているのですが、これは坐摩神社の境内の中に陶器神社という末社があり、その祭りとして陶器祭が行なわれ、これにあわせて開かれている瀬戸物市です。陶器神社に関連した祭りですので、写真37のような陶器人形―菊人形の陶器版というようなものですが―を作って展示するという催しがおこなわれています。



写真32：高津宮夏祭 縁起物の筐

これらの陶器人形は、5~6年くらい前までは、毎年毎年その年の話題にあわせて趣向を凝らした人形を作っていたのですが、現在では毎年同じ写真37の人形が出るという風になってきています。今でも、坐摩神社の近所のとあるビルには、かつて作られた造り物の陶器人形が残されています（写真38）。

今回は写真を紹介できませんが、例えば数年前ですとNHK大河ドラマの『秀吉』にちなんで、北野の茶会の造り物の人形を展示するなど、その年ごとに趣向を凝らしていました。



写真36：坐摩神社

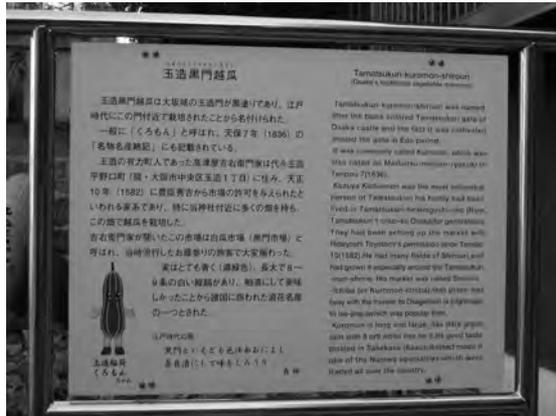


写真33：玉造稲荷神社



写真37：陶器人形



写真34：玉造稲荷神社 玉造黒門越瓜



写真38：陶器人形



写真35：玉造稲荷神社 越瓜のふるまい



写真39：難波神社



写真40：難波神社氷室祭 氷柱の奉納



写真41：難波神社氷室祭 かわり氷の授与

7月21日、22日 難波神社・氷室祭

7月21日、22日に、大阪市中央区にある難波神社で行われる氷室祭です。写真39は境内の様子です。氷室祭という名前のとおり、この祭では毎年、氷柱が献納されることになっています（写真40）。氷室祭のときには、かわり氷を一般参詣者の方に授与するというもおこなわれています（写真41）。このかわり氷を食べることによって夏ばてせずに健康に過ごせるといわれています。なぜかわり氷を授与するかという由来については、「かわり」が「勝ち」に通じるので夏に勝つという意味が含まれているといわれています。また、仁徳天皇の時代に天皇の兄、額田大彥皇子が、夏の狩の途中で野原に氷を貯蔵する氷室を発見し、その氷を天皇に献上しておおいに喜ばれたという故事によるともいわれています。

7月24日、25日 大阪天満宮・天神祭

写真42は、7月24日、25日に行なわれる大変有名な天神祭の、鉦流し神事の様子です。今年から神事を行う斎場がきれいに整備されまして、われわれ調査に行く者としても大変ありがたいことになっています。写真43は鉦流し神事のクライマックス、鉦流しの場面です。神職の方が鉦を流します。この中には人形が入っております。鉦流し神事が終わりますと、参加者は順次、鳥居にかけられた茅の輪をくぐって災厄を祓ってもらいながら、大阪天満宮の方へ戻っていきます（写真44）。

天神祭の時期には、天満宮の境内に御迎人形が飾られておりますので、写真を撮らせていただきました。御迎人形は、本来は御迎船に据付けられていたものですが、今は境内の中に飾るだけとなっています。写真45は鬼若丸、つまり弁慶の幼少時代の人形です。2005年NHK大河ドラマの『義経』に話題を合わせて展示する人形を選んだのだと聞きました。写真46は八幡太郎義家、つまり源義家です。これも大河ドラマに合わせて、源氏つながりということで展示しているという説明を聞きました。

お迎え人形のほかに、写真47のようなシジミの貝殻で作った藤棚が飾られています。夏の暑い時期に藤棚というのは季節外れですけれども、造り物というのは、あえて季節外れなところに、工夫

して藤棚を作り出すという趣向に面白味があるものだそうです。

同じように造り物として、乾物で作られた「猩猩舞」が展示されております(写真48)。高さ2メートルくらいある大きな人形です。材料は乾物でそろえており、袴の部分は昆布だそうです。上着の部分は同じく昆布ですが、表面を薄く削ってとろろ昆布のように白くしたものを用いています。飾りの部分は干しシイタケを使うなど、すべて乾物で作られています。これを作られたのは天満天

神御伽衆というボランティアの方たちで、江戸時代の文献を頼りにして制作されたそうです。その文献は、『造物趣向種二種』という造り物のアイデア集の本なのですが、造り物の材料と完成図は示されているものの、どのように組み立てるかという制作方法までは記されていないので、実際に制作するとなると大変な苦勞があったと聞きました。例えば「乾物の猩猩舞」の袴を昆布で作るにしても、袴を縫い合わせるにはいったいどうすれば良いのかなどの苦勞があったそうです。



写真42：天神祭 銚流神事



写真43：天神祭 銚流神事



写真44：天神祭 茅の輪



写真45：御迎人形 鬼若丸



写真46：御迎人形 八幡太郎義家



写真47：造り物 シジミの藤棚



写真48：造り物 乾物の猩猩舞



写真49：玉出だいがく夏祭 だいがく



写真50：玉出だいがく夏祭 だいがく

7月24日、25日 生根神社・玉出だいがく夏祭

天神祭と同じく7月24日、25日に行なわれている、大阪市西成区生根神社の玉出だいがく夏祭です。写真49にあります、提灯がたくさんぶら下がっているのが、だいがくです。かつてはもっとたくさんありましたが、戦争で焼けてしまっただけ残っていないそうです。本来はこれを担いで町内を練り歩くのですが、見ての通り大変背の高いものですので、今では電線にひっかかって歩きづらいうことで、このように飾っておくだけになっています。写真50も同じくだいがくの写真です。小さいだいがくが一つありますが、これは子供用のだいがくです。

現在、だいがくの提灯は合計78個吊るされていますが、もともとは提灯が66個吊るされていたとされています。66個という提灯の数は、攝津国、河内国などという昔の国別でいうと、日本全国66

州に分かれているということから66個の提灯を吊るしていたといわれています。

写真51は明治時代の絵ですが、本来はこの絵にあるように、だいがくは大勢で担いで町内を練り歩いて威勢をあげるというものだそうです。

7月30日～8月31日 住吉大社・住吉祭

大阪の夏祭りは「愛染さんから住吉さんまで」といわれますが、その最後の住吉祭です。住吉祭も今まで紹介してきた事例と同じく、茅の輪をくぐって災厄を祓うという儀礼がおこなわれます。写真52は人形の入った箱をかついで茅の輪をくぐる場面です。写真53も同じく、大きな茅の輪が門に沿って設けられています。さて、住吉祭は7月30日から8月1日にかけて行なわれますが、8月1日は住吉大社から堺市の宿院にある頓宮というお宮まで神輿の渡御が行われ、これをもって大阪の夏

祭りが幕を閉じるということになっています。昨年までは比較的小さな神輿（写真54）と、船の形をした台車に乗せて曳く神輿（写真55）、この2つが住吉祭に出る神輿だったのですが、今年は45年ぶりに復活させたという、神輿渡御がおこなわれました（写真56）。今まで交通の事情などからこのような大きな神輿を担いで堺まで渡御するのは難しいということで昭和35年を最後に廃止されたままだったのですが、復活を望む声が多く、今年は45年ぶりに復活したとのこと。写真57は同じく神輿を担いでいる様子です。写真57などを見ますと、たしかにこの大きな神輿を担いで練り歩くのは昨今の交通事情では苦しいだろうなという感じがいたします。

最後に、写真58は住吉大社の鳥居ですが、鳥居をくぐったその先に神輿がいます。写真58で見ますと、鳥居をくぐって境内を出て行き、左折した方向が堺市です。神輿は住吉大社の境内を出て、無事に堺市宿院の頓宮に渡御し、大阪の夏祭りが幕を閉じるということになっています。



写真53：住吉祭 茅の輪



写真54：住吉祭 神輿



写真51：玉出だいがく夏祭



写真55：住吉祭 神輿



写真52：住吉祭 茅の輪くぐり



写真56：住吉祭 神輿



写真57：住吉祭 神輿



写真58：堺市宿院の頓宮へ渡御

内田吉哉（関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターRA）
祭礼遺産研究プロジェクト所属。関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程在籍。主な研究テーマは、太子伝や聖徳太子絵伝など、聖徳太子信仰の文化史。

以上の大阪の夏祭り調査を、黒田一充助教授の指揮のもとに、大学院生に調査員として協力していただき実施しました。その調査によって得られた基礎的データを元に「大阪の夏祭りカレンダー」制作に役立てることを考えておきまして、まずは関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターが発行していますニューズレター『難波潟』第1号に特集記事としてカレンダーを掲載いたしました。以上、なにわ大阪文化遺産学研究センターの祭礼遺産研究プロジェクトが2005年7月におこないました大阪の夏祭り調査の報告とさせていただきます。ありがとうございました。